

ものがたり山名氏八百年

巻頭写真等	2
一、風かおる-鎌倉山名氏-	3
山名八幡宮と太祖義範	4
六人受領衆	4
清和源氏	5
鎌倉山名氏	6
二、花吹雪-室町山名氏-	7
梅津長福寺	8
山名氏の台頭	9
建武の中興	9
観応の擾乱(じょうらん)	10
六分一殿	10
明徳の乱	10
北野経王堂	11
再中興宗全	11
嘉吉の変	11
例と時	12
応仁の乱	12
宗全の臨終	13
山名氏中絶	14
三、紅葉燃ゆ 近世山名氏	16
村岡藩領氷ノ山	16
最後の藩主	16
藩祖禅高	17
徳川氏と山名氏	17
禅高神号と孝仁天皇	17
花園東林院	18
大江磐代君(おおえいわしろきみ)	18
十代義問	18
補記	19
山名氏遺跡ガイド	21
関東(群馬・東京)	21
洛中(京都)	22
丹波(京都・兵庫)	24
摂津・播磨(兵庫)	25
但馬(兵庫)山名氏本貫の地	26
因伯(鳥取)	29
河内・紀州(大阪・和歌山)	31

美作(岡山)	32
備後(広島)	33
山名氏略年表	34
おわりに	38

ものがたり山名氏八百年内容紹介

巻頭写真等



此隅山城と山名軍団

此隅山城とその周辺に残る砦や建物跡を忠実に復元した絵 図です。筆者は歴史研究
家吉田順一氏。 版權は「出石有子山此隅山城の保存を進める会」ご提供を感謝
します。



村岡藩陣屋図

但馬村岡藩の政庁。明治4年陣屋取毀し直前に写生された絵図です。(村岡法雲寺蔵)



西国寺金堂と山名一族の寄付帳

備後守護職山名持豊(宗全)を筆頭に一族の面々が寄進しています。上の金堂は当時の山名氏の勢威を遺憾なく今に示す唯一の証明資料です。(国重文)

一、風かおる-鎌倉山名氏-

山名八幡宮と太祖義範

文治二年(一一八六)初夏。

上野国(こうずけのくに)山名郷(現、群馬県高崎市木部町古八幡)に鎮(しず)もる山名八幡宮の広前では、領主山名義範(よしのり・山名氏太祖(たいそ)=初代)の平家追悼凱旋奉告祭がとり行われています。

義範ときに五十二才、優に五尺八寸(一七五cm)はありましようか。引き締まった長身を爽やかな褐(かちん)の直垂(ひたたれ)に包んで拝殿中央に坐した五体からは、山名氏一統の棟梁(惣領)にふさわしい威厳が匂いたってくるようです。

義範のやや左後方には次男の重国が、若々しい萌黄の直垂姿で控えています。そのうしろを横一列に一党の主だった将領(指揮者)が、いずれも晴の装いで神妙に頭を垂れています。

.....

諸仏救世者(しょぶつぐぜいしゃ) 住於大神通(じゅうおだいじんずう)

以悦衆生故(いえつしゅうじょうこ) 現無量神力(げんむりょうじんりき)

.....

社僧が合誦(ごうじゆ)する法華經神力品(ほけきょうじんりきほん)を聞きながら義範は胸のなかで語りはじめました。

「南無八幡大菩薩、源家累代尊靈もご照覧あれ。ここに末孫源義範、去(い)んぬる寿永三年に鎌倉殿(源氏の長者頼朝)のおん下知(げち)を畏(かしこ)み、平家討伐に馳せ参じました。我等山名一統は擬手(からめて)の大將軍九郎判官殿(頼朝の弟義経)に寄騎(よき)して戦の難所を次々と陥し、見ん事平家の大軍を打ち破り、本日めでたく凱陣つかまつりました」

拝殿左廂(ひさし)のむこうに見える山名城から若葉の香りをたっぷりふくんだそよ風が、まだ木の香の残る社殿に流れこんできます。

「此度(こたび)の大勝はひとえに判官殿の作戦によるもの...。さはいえ、あまりにも奇手妙手の連続にて、戦に慣れた坂東武者(関東の武士)の我等でも合点のまいらぬことばかり、はては戸惑うものや不平不満を訴えるものが続出したのには困(こう)じはてましてござる。たとえば我等は乗馬を太刀合わせ(一騎討ち)の場に用いるものと心得、幼きよりさように習練つかまつりましたが、判官殿はことちがい、軍勢の移動、行軍に用いられます。普通なら三日はかかる長途(ながみち)を僅か一日で駆け通す。それにまた、道なき道を遮二無二駆けあがり駆けおるなど。一の谷合戦がそうでおじやった。平家方はまだ合戦には間がある、こんな急斜面からは敵も来るまい、そう安心しておるところを突いた次第なれば、敵方は戦うよりも逃げるが先と...」

山鳩が鳴いている。読経の重々しい声が続いている。義範のつぶやきも続く。.....

六人受領衆

「身共(自分)は年嵩(年長)なれば、矢戦や太刀打は若殿原にまかせて、もっぱら一軍の束ねに心が

けてまいりました。じやによって、花々しい首取り功名こそ無けれども、陰の苦勞をお認めあって、従五位下(じゅうごいのげ)・伊豆守(いずのかみ)、六人受領衆筆頭の

栄を賜いましたぞ。従五位と言えは殿上人(宮中にあがれる身分の人)、無位無官の坂東武者のなかでは、これで、もう押しも押されぬ一軍の旗頭となりもうした。歴代尊霊もおん心和ませ給え」

清和源氏

源(みなもと)という姓は、もともと天皇の御子、親王や王が臣籍にくだるときに与えられるものです。臣下ではあっても天皇友と同じ血統であることから、水源は一緒という意味がこめられています。平安時代にいくつかの源氏が生まれました。嵯峨天皇から発した嵯峨源氏、清和天皇の浦和源氏、村上天皇の村上源

氏などがありますが、中でも武士として有名なのが清和源氏です。

清和源氏は第五十六代清和天皇の第六皇子貞純(さだすみ)親王の子経基王(つねもと)おう・六孫王・ろくそんのう)が初代で、以後多田源氏・河内源氏と発展して、

八幡太郎義家の頃めざましい軍功にかがやいたので、武士の棟梁と仰がれるようになりました。

義家の次男義国は故あって東にくんだり、新墾(にいはいり・原野の開拓)の拡張にっとめて着々と武士団を育てます。

その子義重と義康は、上野国新田荘(現、群馬県新田郡)と東に隣る下野国足利荘(現、栃木県足利市)に分かれて武威を競います。

このことが後に新田義貞と足利尊氏の対決にまで発展するのです。

山名義範は義重の長男ですから、新田氏勢力圏の西方を守るために山名荘を本貫(本拠)の地として新しく一家を構えたのです。

「祝(はうり・神主)どの、これなるは伝天国(でんあまくに)の宝剣でおじやる。戦勝の御礼までに当社神前に献じようと思うてな。都じゅうずいぶん探してようやく求めた一口。

長く尊席まぢかにお納めくだされい」

近習が捧げ持つ三宝から白鞘の一刀をとりあげた義範は、ムウッと息をつめておもむろに抜き放ちます。

瞬間、畑と雷光が走ったような凜冽(りんれつ)の気が拝殿いっぱいにはびこりました。刃渡りは二尺三寸(約七十cm)ほどでしょうか。

両刃(もろば)の剣は青黒いまでに澄んだ柾目肌(まさめはだ)の地鉄(ぢがね)に新月の淡さにも似て白く煙る焼刃を直に走らせていて、見るものを恍惚の境にさそう逸品です。

「ハハアッ、これがあの、噂に聞く天国でござりまするか。なるほど見事な出来ばえ、ご神宝にはこの上ない結構な一口、つつしんでお納めいたしまする」

「祝どの、このお社を建てたのは確か安元のころ(一一七五～七六)

であったな。あれから十年、まだ整わぬ殿舎もいくつかある。これからは心して追い追いに建てて進ぜよう。社領も増やしてつかわそうぞ」

義範は頬の肉をゆるめて穏やかにこう言い添えました。

山名八幡宮は、その後、山名町の現在地に移遷されました。天国の宝剣は、八百年たった今も、神々しい耀きを放っています。

鎌倉山名氏

この文治から建久にかけての十数年、鎌倉幕府という日本の国ではかつて無い武家政権が生まれたため、征夷大將軍の源頼朝や御台所政子の実亥である北条一族、そしてまた、関東の各地で実力を蓄えつつある御家人(將軍家譜代の家臣)たちは、幕府の陣容をととのえるために夜を日に継ぐ忙しさでした。義範もまた、幕府の中枢にあって、源氏一統の長老たるにふさわしい重責を担っております。

しかし、頼朝の没後、後継の頼友・実朝の二將軍が内紛で横死すると、幕府の実権は北条一族が独占してしまいます。

足利・新田・山名 などの源氏の名流は不遇な境涯を堪えしのぶのです。

そして、この面々が再び天下に躍り出すのは、この後百数十年の建武の中興を待たねばなりませんでした。

梅津長福寺

文明五年(一四七三)三月。

洛西梅津(現、京都市右京区梅津中村町)に薨(いらか)も高くそびえる花園上皇御願寺の大梅山長福禅寺は朝から重々しい空気に包まれています。

客殿奥の一室に臥せった西軍の総帥山名宗全が今しも七十年の生涯を閉じようとしているからです。

洛中洛外からの伝騎はいつもの通りあとを絶ちませんが、いずれも門前の衛士(えじ)に押しとどめられて、乗馬を一町(一〇九m)ほど離れた松林に繋ぎ、足音をひそめて大方丈(本坊)に置かれた本陣へ向かうのでした。

山内の正法・大慈・瑞光ら子院に分宿している西軍方の大小名も等しく客殿の物音に耳をそばだてております。

応仁・文明の乱が勃発以来七年、山名軍は花の御所(将軍の御所)西隣の山名邸を本陣としたので、そこを西陣と言い、軍勢を西軍と呼びます。

従う武士は十数万、全国から馳せ参じた強武者揃いです。対する東軍は細川勝元を中心にこれまた十余万、合わせて三十万もの軍兵

がなだれこんでの攻め合いですから、花の都はたちまちに焼野が原となってしまうました。

『汝や知る、都は野辺の夕雲雀(ゆうひばり)、あがるを見ても、落つる涙は』
飯尾(いひのお)某はこう詠んで都の人々の悲しみのほどを訴えております。

そのころになると宗全は西軍の本陣をこの長福寺に移しています。

ここは都の西玄関です。山陰山陽を地盤とする宗全は、かねて戦術上の重要性からこの大寺に目を着け、洛東南禅寺とともに山名氏の拠りどころとしていたからです。

居室の正面押板(床の間)には宋元舶載の古筆と思しい禅画の三幅対(さんぷくつい・三本で一組になった軸物)が掛けられ、その前に置かれた三具足(香炉・燭台・花瓶)からは蘭麝(らんじゃ・銘香)の煙がうっすらと流れています。

この頃から流行しはじめた東山文化の典型的な様式です。普通なら、このような場合は正面に阿弥陀如来像を祭り、その御手から五色の綱を垂らせて病者に握らせませす。仏のお迎えを信じ極楽往生を確かなものとする臨終行儀なのです。

宗全は『わしは鞍馬山の毘沙門天じゃそうな。一休坊主がそう言いよった。毘沙門天ならわざわざの来迎もいるまいよ』と笑い飛ばしたということです。

しかし、かつては赤入道と渾名されるほど活力にみちた宗全の双頬は血の気を失っていました。

枕頭には禅の師であり善き友でもある南禅寺真栗院主の香林宗筒禅師(こうりんそうかんぜんじ・一説には大蔭宗松とも)や嫡孫政豊ほか身内の数人が沈痛な面持で宗全の顔を見守っています。

「……ムムウッ……何処じゃな、ここは。ゆゆしげな武者どらが居並んでおじやるがー。オオッ、教豊(宗全の嫡男)ではないか、末座に控えたあの若者は……。しきりに手招きをしておるわ。なるほど、あれの上座に空いた円座がひとつ。あそこがわしの席というわけか」
「……ああ、父上(時熙)もおいでじゃ。祖父上(時義)も曾祖父(時氏)も……。正面におわすは太祖義範公か。すると此処は上野国山名館でもあろうか。

わしはどうとうあの地を踏むことなしに終わるかと思うておったが……」

「侍て教豊、じきにまいる。まいるが、その前にひとつしておかねばならぬことがある。政豊じゃ。政豊に氏の長者(棟梁・総領)の心構えを申し聞かさねばならぬ」

宗全は次第に深い水底にでも引きこまれるような眠たさと脱力感を払いのけるようにカッと両眼を大きく見開いて

「政豊ッ、政豊はおるか」

と、声だけは普段とかわりなく呼びかけました。

「ハイッ。政豊はこれに」

「うん、そうじゃったな、政豊。祖父はな、今から教豊のそこへ参る。そなたの父じゃ。あれがしきりに呼んだるでな……。ところで政豊、そなた幾才になりやったな」

「ハイッ、三十才になりまする」

「そうそう、そうであったわ。応仁元年の軍で教豊が矢傷を負い、それがもとで身罷(みまか)ったとき、そなたは確か二十四じゃった。あれから六年、そなたの棟梁ぶりはよう身につけてきた……」

政豊の顔を見つめる宗全の臉が次第に細まっていきます。

「じゃがな、政豊よ。武者は強いばかりでは駄目なのじゃ。若いそなたには納得いくまいが、祖父の言い遣(のこ)しじゃ。よく聞いておいてくれい」

宗全はそこで話をとめて、二度三度と大きな息を継ぎました。

山名氏の台頭

「わが家のナァ、昔のことはさて措くとして、天が下に山名ありと知られるようになったのは、そちも知っての通り中興時氏公からじゃ。公はわしの曾祖父になる。そなたには五代まえの大祖父(おおじい)じゃな」

建武の中興

「その頃、天下は二つに分かれていたそうな。帝や公家衆も二つ、武家も二つにじゃ。我等源氏の一統は執権(鎌倉幕府の最高権力者)北条氏の専横(せんおう)に堪えること百余年、いや我等ばかりではない。時代とともに力を蓄えはじめた新興武豪集団。これらも幕府の体制からはみ出した冷や飯組じゃ。時あたかも皇位を嗣がれた後醍醐の帝は御名の通り醍醐・村上天皇の御代・延喜天曆(八九七―九五六)の昔を回復し、天下の権を幕府から取り戻さんがために、討幕の綸旨(りんじ)を諸方に降されたのじゃ。なかでも、新田・足利という源家の名門には大きな期待がかけられていたぞ。元弘三年(一三三三)、足利氏は都の六波羅(幕府軍の京都駐屯本部)を陥し、新田氏は鎌倉を降して、執権高時を自滅に追いこんだわ」

「わが祖時氏公は新田氏の流れながら、足利方に与された。これは賢明な選択であった。尊氏公とは従兄弟半という血縁もさることながら、新田の棟梁義貞公と尊氏公の人物の軽重を見抜かれてのことぞ」

「こうして出来上がった蓮武の中興も、平安王朝の栄華到来とばかり有卦(うけ)に入る貴族連と、一所懸命 おのがかち得た土地を命がけで守る を旨とする武士層は所詮共存することができなんだ」

「こんな戯れ歌が流行したと言うぞ。

このごろ都にはやるもの

夜討・強盗・謀略(にせれんじ).....着つけぬ冠

上の衣(きぬ) 持ちもならわぬ笏(しゃく) 持ちて 内裏(だいり) まじりは 珍らし
や...

義貞公は新政権に加わって、一時は威勢を振ったかに見えたが、それも僅か三年たらず、新政に抗する武士団に追われて越前の国で敗死、帝は吉野の山中に亡命されるというあつけない結末じゃ。

片や尊氏公は武家・農民層の保護者として、推されて室町幕府を開かれたわい。

わが時氏公は、時代がこのように動くのをお見通しだったのじゃ」

観応の擾乱(じょうらん)

「ところがじゃ。公平で私欲のうすいが評判の尊氏公にも敵が出てきてのう。腹心の執事高師直(こうのもろなお)まず失い、それが片付いたかと思うと実の弟直義(ただよし)公と不和がおきる。

帝もまた京と吉野の両方で、それぞれ己こそ正統と張り合うてござる。

天下はまたしても二つに割れてしまうたわい。

時氏公は思われるところあって、一時(いつとき)吉野の南朝から錦旗をいただかれてのう。

十二年が程、西国の諸所で武名を挙げられた。伯耆・因幡・但馬・美作...」

「.....こう言えば軍好きの猪武者とも思えようが、違うのじゃ。政豊よ。曾祖父(ひいじい)はな、攻めるときには火を吹くばかりに攻め、和するときには親子兄弟にも勝るほどの睦まれようであったそうな。

われらが本貫とする但馬の国がそれじゃ。この国には飛鳥・奈良の昔から勢力を張ってきた豪族がおってのう。今の太田垣・垣屋・八木らがそれじゃ。

曾祖父は彼等と戦うて但馬の国を攻め取るよりも、笑顔のうちに味方に引き入れる方が良策と、まああれこれ苦勞はあったものの、今では山名四天王ということでわが家の重臣に納まっておるわい」

六分一殿

時氏(一三〇三 - 一三七一)は世に「六分一殿」と呼ばれています。

一族で日本六十余か国の六分の一(伯耆・因幡・美作・但馬・丹波・丹後・紀伊・和泉・備後・出雲・隠岐の十一か国)を領するという足利幕府きっての大勢力を備えたからです。

時氏には十七男五女という沢山な子がありました。なかでも師義(もろよし)・義理(よしまさ)・氏冬・氏清・時義等が知られています。

明德の乱

坂東の一荘に興った山名氏がここまで急成長した事実は、山名一族にとって喜んで良いのかどうか。

時氏・時義という二大実力者が世を去ったころ、三代将軍義満は”山名つぶし”にとりかかりました。

山名氏の総領時熙(ときひろ・時義の嫡子)とその伯父氏清・義理らの間に楔を打ちこんで内部分裂を計ったのです。

将軍は初めに氏清を使噓(しそう)して時熙を除こうとし、翌年には時熙側の後押しをして氏清等を叛乱させる。これを”明德の乱”といいます。

この戦には将軍みずからも幕府軍を率いて出陣しましたから、氏清等は逆賊の汚名をかぶらねばなりません。悲憤に燃えた氏清軍は自滅を覚悟で奮戦、武門の意地を示して討死します。

時に明德二年十二月三十日、氏清四十八才、時熙二十五才でした。

戦後五日めの明德三年一月四日には早くも山名一族の所領が没収・再配分されました。

総領家時熙には但馬・因幡・伯耆の三国が辛うじて認められたのです。

北野経王堂

余談ですが、将軍義満はこの氏情討伐が余程気になったとみえ、氏清戦死の地に一大堂を建てて鎮魂の供養をしています。これが北野の経王堂です(現、右京区千本釈迦堂あたり)。

経王とは法華経のことで、追善供養にはこの経を読むことが最高とされます。

将軍は毎年期日を定めて万部経会をつとめました。

法華経は一部八卷二十八品(章)という長篇ですから、僧侶一人につき一部の割で、万部では延べ一万人となります。記録によると、毎年十月五日から十四日までの十日間、毎日千人もの僧侶が出仕しています。

初日には歴代の将軍や御台所(奥方)が参詣聴聞する仕来(しきた)りです。

これだけの大法要を恒例としたのですから、義満将軍の心底がわかろうというもの。

再中興宗全

長広舌がこたえたのでしょつか、宗全は目を閉じて呼吸を調べていましたが、うっすら瞼を開けて話を続けました。

先ほどより声の調子が低くなっております。

「政豊よ、今ひとつ申しておかねばならぬ。聞こえるか」

「ハイツ、よく聞こえまする」

「そうか、では言おう。ほかではない、播州(現、兵庫県域の南半分)のことじゃ。あそこを手にいれたのはこの祖父の仕事。そなたも知っていようが」

「ハイ、だいたい聞いておりまする」

嘉吉の変

「あれは嘉吉(かきつ)一九年(一四四一)。そなたの生まれる三年前だったか。お隣の赤松がどえらいことをやりよってのう。公方(六代将軍義教・よしのり)は首を落されるし、我等が

家の子熙貴(氏冬系、因幡守護職)も巻きぞえを喰ろて斬り殺される。
赤松には赤松なりの理由があつてのことじゃろが、反逆は反逆。追討の鱒手を仰せつかったからには是が非でも我が手で赤松を攻め亡ぼさねばと、二万五千の兵を二手に分けて播州へなだれこんだな。

満祐(みつすけ・赤松総領家)は覚悟を決めていたとみえ、城の山(きのやま)城に楯館(たてこも)りはしたが、思いのほかあっけなく自裁(自決)しよった。

我が家はその功で播磨・備前・美作などをたまわり、ようやく家運を挽回しおおせたが …」

「さて、この播磨が難物じゃ。知つての通り公方(八代將軍義政)は、おのが父を殺した赤松の罪を許すのみか、我等が血を流して得た播備作の權益を、こともあろうに赤松の若僧に呉れてやるなど、正気の沙汰とは思われん。

またぞろ “山名つぶし” が始まったわけよ。

政豊、播州は今なお山名・赤松の二派にわかれて一向に埒があかんが、この始末はそなたの仕事ぞ。

頼んだぞよ」

「ハイツ、この政豊しかと肝に銘じまして」

「じゃがな、政豊。腹立ちまぎれに無理押しはするなよ。立腹すると目先がくらむわい。

そなたはまだ三十、血の気が多いのは止むを得んが、幅広く世間を見渡さねばのう。

播州のことで赤松を見るだけでなく、公方や管領の思惑を推しはかり、拳足(あげあし)を取られぬようにすること。

それから、浦上(うらがみ・赤松幕下の実力者)ら国人衆の動きや民百姓の声にも気を配れよ。その上に忘れてならぬことは自分の足元に注意することぞ。祖父の代までは何とか纏めてきたが、但馬の国人衆じゃとて油断は禁物、今日の味方がいつ寝返るかわからぬのが此の世の中と思え。それが “時を知る” というものじゃ」

「ハハアーツ」

例と時

「そうそう、時を知るといえばこんなことがあつたわ。

文正二年(応仁元年)だったか、関白殿(一条兼良)がわれら武士どもの振舞を、古今にかかると無体な例はござらぬとひどう立腹(りゅうふく)されてのう。

わしはこう申しあげたわい。

『堂上方(どうじょうがた)は何かという和有職故実(ゆいそくこじつ)じゃ先例じゃと昔話をなさるが、今の世は下剋上の嵐が吹き荒れております。下下(げげ)の者と軽うみられた百姓や町人どもが一揆徒党を組んでは富豪を襲い、守護や幕府に刃向こうては徳政を要求する始末ですぞ。この時の勢いを見落して先例にばかりこだわってはいは結極時代からとり残されましよう。今後は例ということばを時と仰せられませい』

とな」

応仁の乱

「ところがじゃ。えらそうにそう広言吐いたわしが時を見そこのうてしもた。
それが此度(こたび)の戦よ。
事の起りは管領家の畠山が二派に分かれての跡とり争い、どこの家でもよくあるわな。
それが、片や細川に応援を頼み、片やこの祖父に泣きついてきよった。
勝元(細川氏の総領)は娘婿ではあるし、わが子豊久(宗全の七男)を養子につかわすなど、
いわば親子同然の仲じゃから、話せばわかる、そのうちに収まるわいと気軽に思うておった
が、これは大きな油断であった。
宗全一世一代の大失敗よ。
勝元めはおのが領国から次々と大軍を呼び寄せてきよる。我等も自然但馬や山陰のもの
どもを呼ばねばならん。火の手はあがるばかりじゃ」
「そうなると、武者どもは武者どもの立場を主張しよって、こちらの制止も何のその...」
「公方も公方じゃ。今の公方(八代義政)には跡をとる男の子がないゆえに、舎弟の今出川
殿(義視・よしみ)を次の將軍にと決めたはよいが、皮肉なことに、そこへひよっこり男の子が
生まれてきよった。
それも御台所富子の方からよ。御台所としてはこの子(義尚)に九代を嗣がせたい。母親なれ
ば無理からぬ話じゃ。わしも仲にはいって随分骨を折ってみたが、動けば動くほど騒ぎが
大きゆうなりおって.....。
肝心の公方ときたら、そんな喧嘩は御免とばかり、わびじゃ・さびじゃ・猿楽じゃ・と遊びごと
に呆(ほう)けてござる。
そうなると、東軍じゃ西軍じゃという戦いももはや山名・細川の手から離れ、国をあげての新
旧勢力の衝突になっ
てしもうた。まっこと時の為す業とは恐ろしいものよのう」

「...思えばこれも、わしと勝元の不心得が引きおこしたこと 去年のはじめ、どうやら和談
成立とまで漕ぎつけたが、そなたも知っての通り、赤松(総領政則)がえろう反対しおって...」

折角回復した播備作のうま味を失うまいとな」

「あとと言うまでもないことながち、和議失敗の責(せめ)を負うて勝元が髪を切った。
わしは切ろうにも髪がないのでう。せめてものことに雛腹(しわばら・年寄の切腹)つかまつろ
うと.....。

そしたら皆が寄ってたかって刀をとりあげたもんじゃから、フフフ... ..。あげくの果がこの
ざまよ。

政豊、潮時をみて、この騒動を収めてくれい。

わしが死んだとなると勝元も否(いな)やはあるまいよ」

宗全の臨終

「...ようしゃべった。これで七十年たまった胸のつかえがおりたような...

孫よ、障子を開けてくれい。 - さくらが見たい」

政豊がにじり寄って開けた障子の外には午後の春陽がやわらかく降りそそいでいました。

庭の手前の心字池には幾ひらかの花びらが浮かんでいます。

青味を増してきた築山の叡山苔にも螺鈿(らでん)を散りばめたように落花が光っています。

錆色(さびいろ)の練堀越しに姿をのぞかせる数株の老桜は、時に吹くそよ風に幾許かの花片を托して禅苑を荘厳するのです。

「政豊、起こしてくれい。最後の頼みじゃ」

肩の肉が薄くなった宗全の背を、がっしりとした若い胸に抱きながら政豊は必至のおももちで込みあげてくる嶋咽をこらえています。

と、そのとき小さなつむじ風がおこりました。

それを待ちかねていたかのように、枝という枝は一斉にそよいで、花・花・花の花吹雪を宗全に贈ったのです。

「...はなが...」

「...ちるわい...」

これが不世出の巨人として慕われ、恐れられもした宗全の遺偈(ゆいげ)です。

文明五年三月十九日(新暦では四月中旬)没。世寿七十才。

遠碧院殿徒三位八州大守最高宗峰大居士。

遺骸は香林老師によって、長福寺境内の楠の根方で荼毘(火葬)に付され、遺骨は東山南禅寺真乗院の隠寮(いんりょう)・遠碧軒(おんぺきけん)に収められました。

同年五月、細川勝元も病没。申し合わせたような両雄の死は、世の人々に言い知れぬ感動を与えました。

翌六年(一四七四)四月三日、東西の若い総帥(そうすい)細川政元と山名政豊の間に和議が成立、傘下の諸将も相ついで領国に引きあげます。

文明九年畠山義就の帰国を最後に、十一か年に亘る大乱は終結したのです。

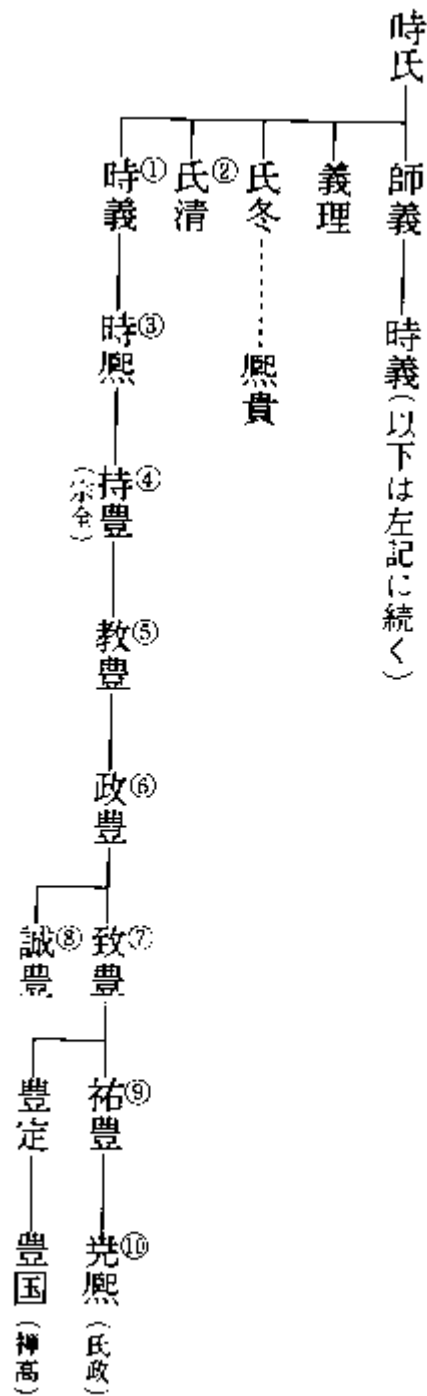
山名氏中絶

政豊は帰国後、祖父宗全の遺命に従って播州の確保と領国但馬の経営に専念します。

しかし、赤松氏側の反撃や但馬国人衆の造反などでやむなく播備作三国から撤退せざるを得ず、晩年は但馬桃島の宗源院で五十九才の生涯を寂しく閉じました。

そのあと、致豊・誠豊と続き、祐豊と氏政の時、織田信長の天下統一によって、山名氏総領家但馬山名氏は史上から姿を消し去ることになります。

山名氏略系図 (二)



○但馬山名氏歴代 (師義も但馬守護職を嗣いでいるので、代数に入れるべきか?)

三、紅葉燃ゆ 近世山名氏

村岡藩領氷ノ山

明治四年(一八七一年)秋十月。ここ氷ノ山(現、兵庫県関宮町地内、標高一五一〇m、中国地方第二の高峰)頂上に立った村岡藩主山名義路とその一行は、眼下にうねりたゆたう山脈(やまなみ)の燃えたつような黄紅葉に息を呑んで佇ち尽しました。「うわあっ、四方八方見通しじゃ。……爺、これがわが領の最高所か」

最後の藩主

義路はこの時十二才。まだ前髪の以合う少年ながら、青々と月代(さかやき)を剃りあげています。この年二月に父義済が三十八才の若さで没くなりましたから、葬儀が終わった四月に家督相続。六月に太政官(明治新政府)より元服・昇殿(宮中清涼殿に参内できること)が許されたばかりです。金剛磨改め義路、従五位下(じゅうごいのげ)因幡守(いなばのかみ)・村岡県知事、これが少年の正式な呼称です。爺と呼ばれた老人は村岡藩筆頭家老池田勳一郎(せきいちろう)。これも正しくは村岡県大参事・太政官出仕・集議院議員です。このとき五十六才。ただでさえ五尺そこそこ(一五〇cm ぐらい)の小軀(しょうく)が、維新前後の東奔西走でいっそう肉を落したので、老翁と呼ぶにぴったりです。「ハイッ若。いや違いましたわい。村岡県知事閣下、この氷の山が七味(しつみ)五郷第一峰、但馬・因幡・播磨三国の分水嶺にごぎいます」「爺、そんな言い方はやめてくれ。でないとこちらも”大参事よ”などと呼ばねばならん。ところで、西の方遠くに見えるのが大山か」「さよう、伯著大山(標高一七一一 m、中国地方の最高峰)。あのあたりに時氏公のお墓があります」「すると、こう西から北にかけての一带が因伯(因幡国と伯著国)じゃな」「いかにも、ついでに、こちらをご覧ください。北から東にかけてが但馬の国、東の山遠くが丹後・丹波となります。そしてこなた南側一带が播磨の国でありまして、南西の側が美作・備前…、備後までは見えませぬ」

「ああ、どちら向いても山名の領国…だったのじゃな。して、わが村岡藩、いや村岡県はどこからどこまでか」

「村岡領は但馬七味郡一円。北の方に海が見えまするなあ。あそこが香住。そこからこの山裾までうねっております川が矢田川、矢田川の流域全部が村岡領でごぎいまする」

「ふう - む、たったこれっぽっちか」

山頂から見おろす其処は展望三百六十度のうち僅か四十度ほどです。

しかも、そのほとんどが広葉樹に覆われた山や谷ばかり、耕地はといえば川筋のところどころに一握りほどずつ張りついているだけです。

「 - - なるほど、一万石じゃものな」

「ちがいまする、若。一万一千石ですぞ」

「どつちにしても知れたもんよ」

「若、それを申されてはなりませぬ。そもそもわが山名家の草創は…」

「おや、また始まった。爺の十八番が」

「辛棒してお聞きなされ。今日ここへご案内したのも、若ご自身の目や耳でしっかりと爺の”そもそも”を確かめていただくためですぞ。若よ。実は村岡県もあと一と月たらずで無くなってしまいます。豊岡県に合併し、やがては播磨・丹波とも一緒になって大きな県になるは

ず……。領主としてわが所領をごらんになるのは今日を措いてほかにはございませぬ」
「さように変わるのか」
「そうです。それがご一新(維新)というものです。では始めますぞ」

藩祖禅高

「そもそもですじゃ。山名氏が今日まで七百年の名跡を伝えることができたのは、ひとえに藩祖禅高公(本名は豊国、一五四八～一六二六)のお働きによるものですぞ。ごらんください。この但馬全域は室町の初めより山名氏本貫の地でありましたが、今を去る三百年前、織田・豊臣の天下統一に反したがために攻め滅ぼされ、山名総領家は一旦断絶したのですぞ。その山名の家名を再興されたのが、こちら因幡の国を治められていた豊国禅高公にございませぬ。因幡の国はもともと六分一殿時氏公の第三子氏冬公の系統が守護職を受けついでおられました。ところが、戦国末期の動乱でどうにも立ちゆかなくなりましてな。但馬宗家から豊定公(総領家祐豊の弟)を迎えて息をついだわけにございませぬ。その第二子が豊国公で、因幡の国最後の守護職となられましたわ。公は天下争乱の行く末をつくづくと観望なされ、西の毛利はもはや命運尽きたり、これからは東の織田が天下となろうと見定められましてございませぬ。しかし、何分にも因幡の国は毛利圏の地つづきであり、国人衆も毛利側とはじっこんにて、若い領主の意向に従いませぬ。あれやこれやのやりとりの末、禅高公は鳥取の城を出て、東の羽柴(秀吉、中国征伐の総大将)に与力なさいました。この分別が山名家を救ったのですぞ。案の定、鳥取城は秀吉公お得意の飢(かつ)え攻めで籠城百数十日の末落城し、毛利色の国人衆も四分五裂という始末。天正十年(一五八二)信長公急逝の後、締高公は太閤殿下(豊臣秀吉)に近侍され、次いで神君(徳川家僕)からは、両家の先祖が兄弟であった因縁から格別の待遇をいただかれてございませぬ」

徳川氏と山名氏

「この山名徳川同族説ですが、さきの略系図をごらんください。太祖義範の弟義季が得川租です。後に徳川と好字に改められたといわれています。」「で、そのころ、名誉ある山名氏歴代の祭祀料として拝領されたのが、此の七味五郷であります。禅高公があのと家臣どもの俵(ま)になって、毛利に組されておれば、但馬宗家と同様に因幡山名の存在など鎧袖一触(かいしゅういっしょく)、一朝にして潰されておりましたでしょうな」

禅高神号と孝仁天皇

「うん、ようわかった。じゃが爺よ。わが家では禅高公だけ、何故”豊国禅高七味権現”(ほうこくぜんこうしつみごんげん)などとお呼びするのじゃ。ほかのご歴代同様に 東林院殿 という院号をお持ちなのに、どうして権現様なのじゃ」「良いとこへお気づきなされました、若。このいわくは家中の老どもあまり知ってはおりますまい。 - たしか神号を戴かれましたのは天保六年(一八三五)、禅高公二百回忌に当ってでありました。この権現号を下されたのは、吉田神道の社家や都あたりに掃いて捨てるほどある名神大社ではございませぬ。恐れ多くも時の帝仁孝天皇御直々の勅諭(ちよくじょう・みことのり)にございませぬぞ。わが家は十代義問公(一八〇八～一八五九)の治世でありました。若よ。法雲寺(藩公菩提寺、兵庫県村岡町)にある勅書をご覧になられませ。それには、この神号を追諡(ついで)

おくり名)するので神法を紹隆し宝祚(ほうそ・天皇の御代)延長を祈り奉れとあって、宛名は東林院御坊となつてございます」

花園東林院

「東林院は禅高公が中興なされた妙心寺山内の一院にて、公ご入滅の禅院であることは若もご存知でござる。あそこは寺でありますとともにわが村岡藩の京都都藩邸にもなっております。つまり、わが藩は東林院を足場にして都の堂上方(宮廷)とつながっておりますのでござりまする」「ああそうか。でも、帝ともあるうお方がわが家ごときにそうやすやすと勅読をくだされようとは思えぬが」

大江磐代君(おおえいわしろきみ)

「それでございます。恐れ多いことながら、帝には山名家と深い御縁がありますとか。帝の御父光格天皇様(第一一九代)は閑院宮家の御出自でして、御生母を従一位大江磐代君と申します。このお方は伯耆倉吉の御出身にて、なんでも伯耆守護職家の山名氏豊公につながるとか。光格天皇と御弟宮、聖護院門跡(しょうごいんもんぜき)盈仁親王(えいにんしんのう)を儲けられまして、晩年は聖護院別邸にてお過しなされました。こう申せば利発な若には事の筋道が見えてくるはず……いかがですか」「そう言われれば何やらわかってきたようなが……。でも、聖護院とやらは歴代皇族方がはられる宮門跡。東林院では近寄れまいに」「若。東林院は妙心寺の塔頭(たちゅう)寺院ですぞ。臨濟宗大本山、花園上皇御塔所、歴代天皇の勅願寺ともなれば……。これひとえに義問公のご明察によるものと拝しまする」「なるほど」

十代義問

「ついでに若、義問公の治世について申しておきます。公は村岡藩ご歴代きつての名君にて、御みずからの博学や能書はさておき、ご領内の仕置が実に立派でございました。まず、学問奨励のために藩学明倫館(めいりんかん)をおこされ、当代一流の教授をお招きあそばしたこと。ために小藩ながら俊才が多く育ち、文教尊重の風が藩内にみなぎり今に至っております。次には殖産興業に力を注がれましたこと。なかでも新田の開発が大きく、山の上や谷の奥が美田になるなどで穫れ高もずっと増えましてな。明治二年、この爺が先頭になって、村岡藩立藩の議を太政官に歎願することがかないましたのも、この新田のおかげと申しております。それから、地域の特産として誇るべきが村岡牛。但馬はもともと牛飼いが盛んな国でありまするが、公は牛の品種品質改良と増産に意を用いられ、ずいぶん多額の資金を注ぎこまれました。おかげで今や、牛といえば但馬牛、但馬牛といえば村岡牛。秋の牛市には全国から馬喰(ばくろう・牛や馬を商う人)が村岡めがけて押し寄せますわい」

「わかった、爺。はらわたに泌みるほど……。なるうことなら弁当を食しながら申せ」

「いやはや、爺としたことがとんだ長談義。あとはお頭けといたしまして、これ、殿様にお昼をさしあげるのじ

ゃ。われらもここで戴くことにする。下山の時刻もあるによって、若、ご無礼のほどは判にご容赦を」

「よいよい。こうやって氷の山のとっぺんで皆と一緒にの食事など、ご歴代公もなされたことは

あるまい。願うて

もない果報よ」

晩秋のぬけるような大空に鳥影がひとつ。この山にしか住んでいないといわれる犬鷲なの
のでしょうか。ゆった

りと羽ばたきながら、一行の頭上に大きな輪をかいています。

天蒼々(そうそう)、地層々。

播因但三国の天地は今、大自然にしか許されない悠久の刻(とき)を、紅に黄に燃えたち
ながら音もなくきぎ
んでゆくのでした。

補記

氷の山探訪から二十日余りあとの十一月、村岡県は隣の豊岡県に合併されます。

旧藩主山名義路は家族と共に上齊し、成人後は陸軍軍人として奉職。

明治十七年の華族令施行によって男爵に列し、後には貴族院議員になるなど、村岡藩主にふさわしい生涯をおくっております。

昭和十五年没。世寿八十一才。村岡藩陣屋奥の桜山御廟に葬られました。

爺 - 池田勳一郎がお預けにした長談義の続きは、日記によれば次のことどもです。

藩祖禅高が秀吉・家康に近侍して、近世山名氏を復興したことは既に述べていますが、その際、かつての総領家である但馬山名氏第十代堯熙(あきひろ・氏政とも)が地下(じげ)に埋もれていたのを救い出し、家康に周旋して旗本にとり立ててもらったという隠れた美談です。

この家系も以後連綿と続いて明治を迎えています。

また、因幡時代の旧臣 武田・中村等、反禅高の首謀者たちが、鳥取械落城後、諸国に流浪しているのを呼び戻し、旧怨を問わずに高禄を与えて家臣団上席に据えるなどで、人の上にたつ者の寛やかな心構えを、爺は若殿に信えたかったといひます。

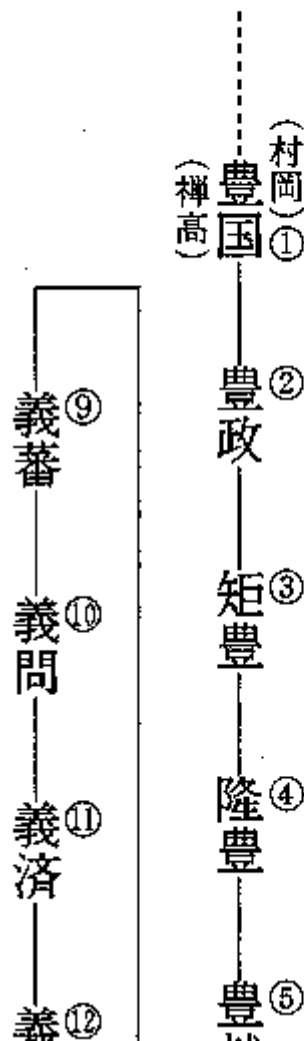
それから爺は、この村岡藩が小なりといえども准三位の格式をもつ家柄であることを内外に闡明(せんめい)した三代矩豊の事績にも触れるはずでした。

三位といえば、徳川御三家の一つ

水戸徳川家と同格となります。矩豊の官位は従五位・伊豆守ですが、但馬山名氏七代致豊が永正五年に將軍義植より賜わった”末代准三位”の御教書に依るもので、徳川幕府もそれを承認している事実です。

寛文九年(一六六九)定督後初

山名氏略系図 (三)



山名氏遺跡ガイド

ここにあげたものが、山名氏遺跡のすべてではない。
不足部分は、めいめいが足を運んで調べてほしい。
ひとつひとつたしかめていくところに、
遺跡探訪の妙味があるのだから。

関東(群馬・東京)



大光院

太田市金山町 37-8 0276-22-2007

建久の頃、新田義重が建てた寺尾七堂に創まる。中世廃絶していたのを徳川家康が、先祖顕彰の意をもって現在地に移し大伽藍を再建した。寺名も義重の法号「大光院殿」により義重山新田寺大光院と改名。通称「太田の呑竜さん」浄土宗関東十八檀柿の一。



新田義重の墓塔

同上

慶長年間に徳川家康が、大光院とともに寺尾の墳墓を移して境内に整備奉安した。徳川氏の太祖義李が義重の六男にあたるとの見解からである。隣接の世良田郷(現尾島町)には日光の旧社殿を移した東照宮を祀り、徳川新田同流を示している。



山名八幡宮

高崎市山名町 0273-46-1736

安元年中、山名氏太祖義範が新田氏から自立した際に宇佐八幡宮を勧請、一族の氏神とした。本文「風かおる」の項を参照されたい。現社殿は日光東照宮にならった絢爛華麗な結構を備えている。



天国の宝剣

同上

天国(あまくに)は奈良時代の刀匠で、日本刀の神様と仰がれている。宮内庁所蔵の“小鳥丸の太刀”が代表作。座代の刀匠はこれを範として神社奉納刀を鍛造した。この一口も鎌倉期の優作として貴重視されている。



山名城

高崎市山名町字下城山

高崎市西方の観音山丘陵にあり、寺尾下城ともいう。北方に続く中城・上城とともに、新田勢力圏の西方を守るために設けられた。現在見る遺構は戦国時代末期に改修された中世山城の典型を示す貴重なものである。



自証院

東京都新宿区富久町 4-5 03-3351-3747

徳川家光の側室おふりの局を葬るために創建された。子の千代姫(尾張徳川光友夫人)の孝心で寺観を整え、東叡山の院室となる。村岡山名2代豊政を葬ってより、山名家江戸菩提寺となり、江戸詰家臣も多くこの寺に葬る。戦災で灰滅の後現状のように復興した。

洛中(京都)



六孫王神社

京都市南区壬生八条角 075-691-0350

清和天皇第六皇子貞純親王の御子経基王を祭神とする。王は天皇からみて孫に当たるので六孫王と呼ばれた。源姓を賜わり、清和源氏の祖となる。子孫繁茂し、今も源氏各流の祖神として崇敬されている。



西陣跡

京都市上京区西陣一帯

応仁の乱のとき西軍の拠点となった山名邸一帯を言うが今は町家に埋もれて往時をしのぶよすがもない。むしろ織物“西陣織”の本場として有名。もっとも西軍の本陣は開戦後右京梅津の長福寺に移された。本文“花吹雪”参照。



長福寺と宗全公灰塔

京都市右京区梅津中村町 36 075-861-1304

花園上皇勅願寺として塔頭 24 か寺を有した大寺院である。都の西口にあるため、丹波・山陰に本拠を置く山名氏との縁故が深く、山名氏歴代が外護につとめてきた。応仁・文明の乱では西軍の本陣となって、北方竜妾寺(石庭で有名)に陣する東軍細川勢と対峙した。

文明 5 年 3 月、宗全はこの寺の一院で没し、境内で苓毘(火葬)に付され

た。遺骨は南禅寺に葬られるが、残灰供養の小塔が建てられた。左右の塔は、宗全に殉死した家臣のものと伝えられ、今もなお毎日供養が続けられている。



南禅寺真乗院と宗全公墓塔

京都市左京区南禅寺福地町 075-771-3084

永享 8 年、山名宗全建立にかかる南禅寺塔頭の一院。宗全の父時熙は禅に村する造詣が深く、南禅寺に栖莫院を創建し、同門の大蔭禅師を開山に迎えている。

宗全は父にならって真乗院とその子院遠碧軒を建て、大蔭と同系の香林宗簡禅師を請じて開山とした。自分や応仁の乱で城没した一軍の霊を弔うためである。真乗院墓地中央に鎮まる五輪塔は“西軍の総帥”という名声にくらべて意外に小さい。周辺には一般の墓がひしめいている。その裏手には有名な琵琶湖疏水の蹴上インクラインが通っている。





妙心寺東林院と禅高公墓塔

京都市右京区花園妙心寺町 075-463-1334
慶長10年、元因幡国守護職山名豊国(禅高)は妙心寺山内に一院を興し、隠栖の地とした。禅高は秀吉・家康の側近として仕え、数百年続く山名の家名を廃絶から守った。近世山名氏の祖といわれる所以である。東林とは中国塵山東林寺に因む寺名である。同寺には白蓮社という僧俗一体の念仏結社があった。禅高はその遺風を慕って東林院を興し、前関白や連歌師紹巴等との風雅な交遊に余生を送った。墓塔は五輪塔で、重厚壮大な風格を示している。



氏清公顕彰碑と千本釈迦堂

京都市上京区五辻通六軒町西入 075-461-5973
この寺は正しくは大報恩寺という。その境内に顕彰碑が建っている。明徳の乱で憤死した家祖氏清鎮魂のために村岡山名氏三代矩豊が納めたもので京都における数少ない山名氏遺跡の一つである。



聖護院門跡

京都市左京区聖護院中町 15 075-771-1880
本山修験宗総本山。天明8年皇居炎上の際光格示天皇の仮御所となる。時の門主は天皇の実弟盈仁法親王。両方の御生母大江磐代君は伯青山名氏ゆかりの出自といい、晩年をここで過された。知られざる山名氏由縁の寺である。

丹波(京都・兵庫)



古福知山城

福知山市中心部
戦後造られた近世福知山城から北方2kmの小丘上にある。南北朝の頃、山陰から丹波にかけて勢二を伸ばした山名時氏が、丹波一国の押えとして築いた城であるが、明確な史料が見当たらないため、人に知られることなく埋もれようとしている。現在はホテルの敷地。



宮田城

兵庫県多紀郡西紀町宮田・坂井地内
応安4年丹波守護山名時氏の築城。応永4年にこの地を受領した山名左近将監時清は宮田を姓とし後代に伝える。城は山陰街道を挟んだ板井城と内増山城の二つからなる。付近には一族を祠った宝篋印塔や五玲塔が多く、今も里人の手で供養されている。

摂津・播磨(兵庫)



多田神社

川西多田院 0727-93-0001
源経基の嫡男源満仲(多田源氏の祖)を祀る堂々たる古社である。神社は丹波高原の南端川辺の平野を望む翠巒の地に鎮もり、社前を猪名川の清流が走っている。付近には満願寺や謡曲で知られる”美女丸伝説”の小量寺があり、ハイキングで賑わっている。



一の谷古戦場

神戸市須磨区・兵庫区一带
寿永3年、源氏は一の谷の合戦で平家に大勝した。山名義範は搦手の義経軍に属し大功をたてる。現地は一の谷・二の谷・三の谷に分かれる。二の谷の正面に平家の本営があるから、古来二の谷逆落し説が有力である。
写真左はこの谷の急坂、下が鴉越の険路。





宗全寺

姫路市青山 5 丁目

嘉吉元年・赤松満祐追討で戦死した山名軍の霊を弔うために宗全が建立した。もとは壮大な寺院であったというが、山名軍撤退のあと赤松氏の勢力下にあつて次第にさびれ、現在は 60 坪ばかりの敷地と小堂・古碑が残るばかり。土地の有志によって祠られている。



専念寺

赤穂市周世 0791-48-2259

文亀 3 年、山名三郎左衛門利氏は播磨から撤退する山名本軍から分かれて残留し、家臣 36 名とともに赤穂のこの地を開拓定住した。集落の中心に草庵を構えて憎玄誓となる。赤穂山名荘のはしまりであり、専念寺の歴史でもある。現住は第 16 代山名義範師。

但馬(兵庫)山名氏本貫の地



三開山城

豊岡市木内地内

豊岡平野にそびえる独立峰。延元 2 年新田義宗はこの城に拠って但馬の南朝方を掌握した。康応 3 年、山名時氏父子は但馬の国人層(太田垣・八木・三宅・田結庄等)を率いて攻略した。山名氏が但馬国を領国化する最初の遺跡である。



九日市守護所

豊岡市九日市字御屋形

ここには古くから市場が営まれていた。新来の守護山名氏は市場の中央に守護所を設け、軍事面・経済面の拠りどころとした。周辺の小丘上に木崎城・妙楽寺城・佐野城等が置かれ、守護所を防衛している。写真は妙楽寺城より守護所跡を望む。



此隅山城

兵庫県出石郡出石町宮内地内
伝承では文中年間、山名時氏の築城という。師義か氏清または時熙のことらしい。
標高 143.7m の山頂から流生する全ての尾根に曲輪を配する放射状連郭式に特徴がある。平成 8 年、国重要史跡に指定。今後の研究がまたれる。



有子山城

兵庫県出石郡出石町町分地内
永禄 12 年羽柴勢侵攻により落城した此隅山城に代わって、2km 程東南の出頂(標高 321m)に山名祐豊が築城した。”子盗み” に対して”子有り”と名付けたが、この城の命運は短く、6 年後の天正 8 年にあえなく落城する。此隅山城と同時に国史跡に指定された。



出石神社

兵庫県出石郡出石町宮内 0796-52-2440
もと国幣中社、但馬一の宮。古来官民の尊崇をあつめている。当然のことながら但馬守護山名氏も歴代が信奉した。宗全の祈願状など貴重な史料が保存されている。



総持寺

兵庫県出石郡出石町宮内 0796-52-2678
此隅山城東北 1km の谷奥にあり、山名氏歴代の祈願寺である。天文 4 年に祐豊が願主となって寄進した十一面観音像から、当時の出名軍団の構成を示す貴重な文書が発見された。



祐豊の墓塔

兵庫県出石郡出石町法城寺 0796 - 52 - 2719
但馬山名氏 9 代祐豊の墓塔は数寄な運命に弄ばれ度々移転するが、近時ようやく有子山頂を望む法妓寺の一角に安住することができた。因みに、この寺は日本刀の法城寺一門とゆかりが深い。



竹田城

兵庫県朝来郡和田山町竹田地内

嘉吉元年、山名宗全が太田垣氏に命じて 353m の急峻な山頂に築城した。虎がうずくまったような形状から、虎臥城とも呼ばれる。東の丹波、南の播磨を押さえる要衝。戦国末期から慶長期にかけて数度の改修がなされた。慶長 5 年に廃城。昭和 19 年に国史跡指定される。



山名赤松両軍供養塔

竹田城駐車場奥

竹田城は山名氏が築き、赤松氏の代に廃された。中世 150 年間に隣り合う播但の地で攻防に明け暮れた両軍の流血を供養するために、平成 2 年、両氏末裔 300 氏の恩讐を越えた協力によって宝篋印塔が建立された。以来毎年有志が集まって親交の実をあげている。



生野銀山

兵庫県朝来郡生野町小野地内

戦国末期に南但馬を領有していた太田垣氏が開発した銀山。産出量が多いので山名祐豊も宗家直轄を主張する。永禄 12 年但馬に侵攻した織田(羽柴)勢はここを接收して代官を置いた。斜陽化した山名氏はこの不条理に抗することができなかったという。



大明寺

兵庫県朝来郡生野町黒川 463 0796 - 79 - 2640

貞治 6 年月席宗光禅師の開山。市川源流の幽邃境にある禅刹。山名時義・時熙父子は月席に心酔した。洛西長福寺にも月庵を招じている。この地は丹波に摸するところから、但馬防衛の門戸としても重要であった。



円通寺

兵庫県域崎郡竹野町須谷 490 0796 - 47 - 1030

康応元年山名時義が月庵禅師を開山として創始。時義・時照の木像が開山堂に桐られ、裏山には墳墓も設けられている。この寺は山名氏菩提寺であるとともに但馬北部の国人衆に対する押さえの一機関でもあった。



楞嚴寺

兵庫県東灘区都浜坂町田井 411 0796 - 82 - 2021
延文 5 年南商溟昌運禅師開山。後に山名時熙の後援を得て禅院として整備されていった。同寺に残る所領関係の古文書多数は中世荘園のありかたを示す資料として学者間で有名。また時熙自賛の寿像は県文化財として知られる。



法雲寺

兵庫県美方郡村岡町村岡 2365 0796 - 98 - 1151
村岡山名氏の菩提寺。同氏は山名宗家を継承したので、法雲寺の御霊屋には太祖義範以降の位牌が奉安されている。境内の山名氏史料館には山名氏に関する武具・什器・文書等が展示されている。



山名氏歴代廟

同上
村岡山名氏歴代のほとんどは交代寄合の身分柄江戸で没しているが、墓所は本貫の地村岡に設けられている。いずれも准三位の格式をふまえた堂々たる墓塔である。廟所は壺溪・桜山・一二峠の三か所にある。中でも一二峠廟はゼンコウジさんとして親しまれている。

因 伯(鳥取)



二上山城

鳥取県岩美郡岩美町岩常地内
文和年間、山名時氏の築城と伝える。因幡守護は三男氏冬の系が受け継ぎ、ここを守護所とした。東方は総領家但馬に続き、西方は因幡平野を望む要害の山城である。4代後の勝豊の時、守護所を西方の布勢天神山城に移した。現在、国史跡に申請中である。



鳥取久松山城

鳥取市久松山地内

天文 14 年、因幡守護山名誠通の築城といわれる。城番の武田高信が主家に叛いたので山名豊国がこれを追い、守護所を移して本城とした。天正 8 年羽柴秀吉の攻城で守護の豊国は退城し、あとに毛利の将吉川経家がいった。翌 9 年秀吉の”渴え殺し”にあい落城する。



布勢天神山城

鳥取市松保地区布勢

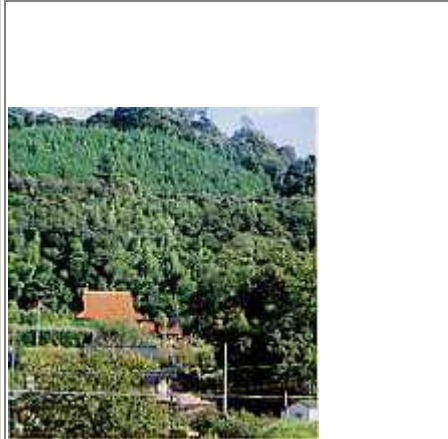
文正年中、因幡守護山名勝豊が、二上山城を出て布勢天神山に守護所を移した。鳥取平野の真中の小丘ながら、湖山池の水を引いて二重の堀を構え、その中に町屋も作られるなど時代に相応した工夫が施された。豊国に至って鳥取城に天主閣を移し廃城となる。



田内城

鳥取県倉吉市巖城地内

暦応 3 年、塩谷高貞を亡ぼした山名時氏・師義父子は伯者国この地で武威を張る。倉吉の平野を望む軍事・経済の要地で、城下に見日干軒の繁栄をもたらせた。時に大洪水で城下町が流失したので、師義は城を南方の打吹山に移した。近年有志が往時の櫓を復興した。



山名寺と時氏の墓塔

鳥取県倉吉市巖城 958 0858 - 22 - 4584

清浄山山名寺の前身は、延文 4 年に山名時氏が創建し、光孝報恩禅寺と移した。七堂伽藍を備え、扶桑十刹の一となる。戦国末期、山名氏の威勢の衰えとともに寺運も弱まり、兵火にかかって瀕廃の極に達する。慶長 10 年倉吉城主となった中村伊豆守により復興、山名寺と移す。山名氏と中村氏の位牌を収める。時氏の墓塔は、もと市内の小田山麓にあって”大将塚”と呼ばれていたが、鉄道用地買収のため、移達して境内裏手の竹林中に改葬した。600 年の風雪に堪えた宝篋印塔はさすが。時氏の法名は光孝寺殿鎮国道静大禅定門。



打吹城

鳥取県倉吉市打吹山地内
延文3年、山名師義が天神川氾濫で流失した見目千軒の田内城を廃して築城した。倉吉平野を眼下に一望するこの城地は、伯耆山名氏200年の偉風を今なお伝えている。因みに打吹の名は天人の羽衣伝説によるもので、悲しい少年の秘話が伝承されている。



駒姫八幡宮

鳥取県倉吉市東町 大岳院内
打吹城下山名館跡の大岳院には、因幡で惨死した山名氏豊を祀る小社がある。氏豊の遺児駒姫とその一統が尊崇したところから”駒姫八幡宮”と呼ばれる。その右隣には駒姫の娘といわれるお林の方「光格天皇御生母大江磐代君御母公」の墓所が並んでいる。



大江神社

鳥取県倉吉市打吹山公園地内
倉吉市街を見下す打吹公園に鎮座する。祭神は「光格天皇御生母・従一位大江磐代君」前項おりんの方の息女である。磐代君は閑院宮典仁親王(慶光天皇)に近侍して光格天皇等4親王を設けられた。大正2年、土地の有志により社殿を建立、目下再建工事中である。

河内・紀州(大阪・和歌山)



壺井八幡宮

大阪府羽曳野市壺井 0729-56-1495
河内源氏発祥の地にあり、本殿には応神天皇・仲哀天皇・神功皇后を祀り、神井神社(壺井権現社)には源頼信・頼義・義家を祀る。社殿は平成の大改築で朱の色も鮮やかに往年の栄華を復旧した。



源義家廟

壺井八幡宮から東南 500m の小丘上に、頼信・頼義・養家の廟所(墓所)がそれぞれ独立して設けられている。いずれも緑濃い木立に覆われて、幽遠の感を催すに十分である。廟所の近くには源家ゆかりの通宝寺跡などがあって、懐古の思いにふけることができる。



南宗寺

堺市旅籠町 3-1-2 0722-32-1654

臨済宗大徳寺派の名刹。大阪夏の陣の時兵火に罹って全焼。沢庵禅師が小出吉英・山名禅高等の援助を得て復興する。沢庵は出石山名氏の重臣の出で、主家滅亡の悲運に遭う。禅高は 24 才年下の沢庵の育成に務めている。



大野城

和歌山県海南市大野地内

南北朝のころ、南北南勢力の接点となった大野城が紀伊国守護所となり、山名修理太夫義理が守護(北朝側)として在城し、紀北一帯に勢力を張っていた。明徳の乱で氏清らと運命を共にした義理は由良興国寺にはいつて出家し、遊行憎となった。



山名氏供養塔

和歌山県海南市別所地内

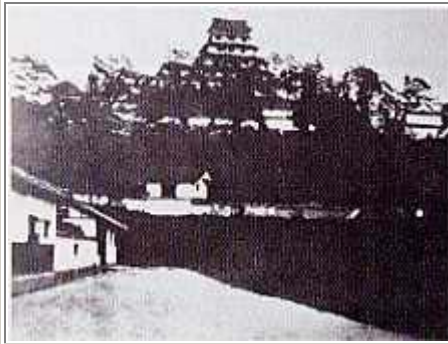
高さ一丈程の五輪塔。氏清の墓という。明徳の乱後、義理等遊行憎団が故地に帰ったとき氏清一族を弔うために建てたものか。同市鳥居の浄土寺(時宗)境内にも義理の塞がある。因みに紀北の地には義理を祖とする山名氏一統が多数現に家門を信えている。

美作(岡山)



岩屋城

岡山県久米郡久米町岩屋番地内
 岩屋山頂(483m)にあり、席安年間(1360頃)山名時氏が伯耆国から錦旗を奉じて南下し、この地に拠る。それ以後、在地勢力の赤松氏と争奪をくりかえすことになった。山城の遺構は比較的良好に保存されている。



津山城

岡山県津山市山下地内
 嘉吉元年(1441)美作守護となった山名教清は一門の山名忠政に命じて現在の地に築城させた。今に残る厩堀・薬研堀が当時の規模を伝えている。文明のころ山名氏退去で廃城となったが、慶長期に入部した森忠政によって近世の城郭となり明治に至った。国指定史跡。



鶴山八幡宮

岡山県津山市城代町地内
 もともと鶴山(つやま)城内にあり、山名忠政によって祠られていた神社で、後年入城した森忠政が「彼も忠政・我も忠政」と同名の因縁をかしこみ、神社を現在地に移して奉安した。国重文指定。



神楽尾城

岡山県津山市小原地内
 津山城西北2kmの独立峯神楽尾山頂に築かれた中世山城。山名氏との関連を示す資料は乏しいが、天文元年(1532)尼子経久が進攻したときは山名右京太夫氏兼が居城していたと伝える。本丸跡からの望めは”四周展望の城”の名にふさわしい。市指定史跡。

備 後(広島)



西国寺

広島県尾道市西久保町 29 - 27 0848 - 37-0321
 天平の古刹、真言宗醍醐派大本山。永享年中(1430 頃)衰微していた堂塔を、備後守護山名宗全ら一族が巨費を献じて再興した。なかでも金堂(国重文)は和様を基調とした優雅な風格を誇る。
 □絵写真参照。



天寧寺

広島県尾道市東土堂町 17 - 29 0848 - 22 - 2078
 貞治 6 年(1367)春屋妙葩閉山の禅刹。
 康応元年(1185)將軍義満厳島参詣の折、備後守護山名時義の名代として時熙が尾道に下り、將軍を接待した。その時天寧寺の浜より御座船まで船を連ねて浮橋としたのが好評であったという。

山名氏略年表

年次	西紀	山名氏の事跡	関連事項
天安 2	858		清和天皇即位。
貞観 16	874		貞純親王生。
延喜 9	909		六孫王経基、源姓を賜う。
安和 3	970		源満仲、拜津守。多田源氏の始。
寛仁 4	1020		源頼信、河内国壺井に抛る。河内源氏の始。
寛治 5	1091		源義家後三年の役で大功。関東の武士多く旗下に属す。
永久 5	1117		新田義重生。
保延 1	1135	山名氏太祖義範生。(義重長男、新田太郎)	
保元 1	1156		義重、保元の乱で功あり、新四庄下司職となる。
仁安 2	1167		平清盛、太政大臣となる。
治承 3	1179		以仁王、平家追討の令旨を発す。
治承 4	1180	義範、頼朝幕下に参じ供奉する。	頼朝、令旨を受けて挙兵。
養和 1	1181		義重、頼朝と不和。

寿永	3	1184	義範、平家追討に出陣。捕手義経軍に与力する。	木曾義仲敗死。一の谷の戦。
文治	1	1185	平家滅亡。義範従五位下伊豆守に任ずる。	屋島・壇の滞の戦。
	2	1186		義重、上野・越後両国の守護に任ずる。
建久	4	1193	頼朝、新田の城に滞留。義範供奉する。	
正治	1	1199		頼朝没。
建仁	2	1202		義重没。従五位下左衛門尉。
	3	1203		頼家修善寺に幽閉、実朝将軍となる。
承久	1	1219	太祖義範没。従五位下伊豆守。	将軍実朝殺される。
	3	1291	重村、承久の変に従軍戦功をたてる。この頃四代重長(義長)五代義俊六代政氏と続く。事蹟、卒去の年月不詳。	承久の変。
文永	11	1274		文永の役。
弘安	4	1281		弘安の役。
正安	3	1301	六代政氏、上杉重房の女を要る(足利氏と縁つづく)	
嘉元	1	1303	七代時氏生。	
文保	1	1317		文保の和談。
正中	1	1324		正中の変(討幕計画露蹄)
元弘	1	1331		元弘の乱(天皇、笠置に遷幸、討幕拳兵失敗)
	2	1332		天皇、隠岐島へ配流。護良親王拳兵。
	3	1333	政氏・時氏父子、足利方に付く。旗印の大中黒を改め三引両とする。	足利尊氏・新田義貞拳兵。幕府滅亡。
建武	1	1334		建武の中興。
	2	1335	時氏、足利尊氏軍に従い戦功斯著。	中先代の乱。
	3	1336	時氏、多々良浜の戦湊川の戦に功績大、	尊氏、幕府を開く。(天皇、青野に遷幸)
	4	1337	時氏、伯著固守護に任ずる。	
暦応	1	1338	新田義貞敗死。	尊氏征夷大將軍となる。

	3	1340	時氏師義父子、塩谷高貞を出雲国に討つ。	
貞和	1	1345	時氏、丹波高山寺に萩野を攻め勝利。	
	4	1348	時氏父子、揮津天王寺に楠正行と対戦し敗れる。	
	5	1349		観應の擾乱(高師直・足利直義失脚没)
文和	1	1352	時氏、南朝に参じ端旗を受ける。	
	2	1353	時氏等南朝軍勢入京する。	将軍義詮、江州に出奔。
	4	1355	時氏、伯耆菅に帰国。	神南合戦。尊氏北帝入洛。
康安	1	1361	時氏師義、美作攻略。時義 16 才初陣。	
貞治	1	1362	時氏勢、美作・備前・備中・備後・播磨を攻略する。	
	2	1363	時氏、義詮将軍と和し、但・因・伯・丹・作・雲・丹後を領する。時義、但馬守護職となる。	
	6	1367	時熙生。	月庵宗光、但馬に入る。
応安	1	1368	時氏、幕府評定衆五人の一となる。	
	3	1370	時氏隠居、六分一殿(但馬・因幡・伯耆・美作・丹波・丹後・紀伊・和泉・備後・出雲・隠岐の十一か国を領す)	
	4	1371	時氏没。従五位下伊豆守。	
				長慶天皇後村上天皇吉野に遷る。
永和	1	1375	時義、侍所別当となる。	
	2	1376	師義没 52 才。従五位下伊豆守。	
	3	1377	氏清、父時氏の七回忌を三条大宮長福寺に修する。	
康暦	1	1379	時義、備後国を賜わる。	
嘉慶	2	1388	時義、父師義の十三回忌を第宅に修する。	
康応	1	1389	時熙、尾道天寧寺にて将軍を接待する。時義没 44 才。従五位下	三代将軍義満、巖島参詣。

			伊豆守。	
明德	1	1390	時熙氏之兄弟、故に会い備後に蟄居する。氏清・満幸但馬に入る。	
	2	1391	氏清・満幸、幕府に叛く。時熙之を討つ。時熙、將軍より篠造りの太刀を賜わる。時熙、旗の蟬元に篠の葉をつけ戦う(七葉根篠紋の起源)氏清没。従四位下陸奥守。	明德の乱。
	3	1392	明德の乱後処理により、山名氏は但・因・伯三国となる。義理、由良興国寺にて出家遁世する。	
応永	2	1395	満幸誅される。	
応永	5	1398	時熙司職となる。	三管四職の制定まる。
	8	1401	備後守護時熙、代官に佐々木・太田短を派遣する。	義満、北野に経王堂を建立。氏清等追善のため万部経会始修。
	11	1404	安芸守護代山名満氏(氏清の子)。持豊生(小次郎)	領国安芸を時熙州に預ける。
	13	1406	安芸守護代滴氏を免じ熙重を補する。時熙、但馬円通寺に田地山林等寄進。時熙、月庵和尚に禅師号を賜う。	
	20	1413	持熙、従五位下に任ずる。持豊元服、將軍義持より偏諱を受ける。時熙(らん真居士)融通会仏縁起編集に参加する。	
	24	1417	時熙、右衛門督(四位)に任ずる。	
	28	1421	時熙、南禅寺に檀真院を営む。	
	29	1422	教皇生(小太郎)	
	30	1423	時熙、入道する。持豊司聴に列する。	
	34	1427	時熙、赤松追討のため下国(中止となり上洛)	赤松満祐、將軍に背く。
正長	1	1428	時熙の魅嗣に持熙・持豊二派を生ずる。	六代將軍義教(くじ引き)
永享	2	1430	時熙、連歌頭役として著名。	
	3	1431	教豊元服。	
	4	1432	時熙、遣明船三号船を派する。	遣明船派遣、勘合貿易再開。

	5	1433	時熙、伊賀国守護に任ずる。	
			時熙、備後・安芸・但馬・伊賀を持豊に譲る。	
	6	1434	持豊、山門を攻める。	延暦寺衆徒強訴。
	7	1435	時熙没 69 才。従四位上右衛門督。	
	8	1436	持豊、南禅寺に真乗院を建てる。	
嘉吉	1	1441	持豊・教皇父子、赤松追討に播磨出陣。	嘉吉の乱(義教將軍横死。赤松追討軍進発)

おわりに

山名氏八百年。それを僅か五十枚たらずにまとめるのですから、随分と大掴みになってしまいました。

こぼれ落ちたり拾い忘れたことがたくさんあるはずです。

それらは読者の皆さんがを見つけ出して、めいめいの八百年史を仕上げていってください。

そしてまた、皆さんは皆さんの次代をになう若いのちに対して八百五十年史を書き残してください。

どうか九百年史・九百五十年史と書き継がれ語り縦がれますように、そのみを念願しております。

平成十年 歳晩

全国山名氏一族会

ものがたり山名氏八百年編集委員一同

(文責 吉川広昭)

